あとがきを兼ねて(自筆年譜　稿の稿)

年譜というもの、ひとさまのを二つ調べて編成したことがある。岡本潤年譜と小野十三郎年譜で、これは相当に念を入れてやった。もちろん、点検すれば不足は多いが、それでもいまのところ、活字で見られるお二人の年譜では一番詳しいはずという自負はある。

しかしこんど、石野覚さんから、お前がお前の年譜を書けと言われて閉口した。石野さんの下命は、私の過去の作品から選んだ詩集を石野さんが手造りするについてはということで、話の前半はまことにありがたいのだが、年譜の方は難題である。ただ、少々の偶然に恵まれていた。

この二十年余りの間に父、母、妹の順に死んで、残ったのは兄と私だけになったせいで、いろいろな整理に当らざるを得なくなった兄が、こんなものがあると送ってよこすなかに、年譜の出発点となるものがふくまれていたことだ。

まったく偶然としか言いようがない。

もしも私が以前のように身一つで転々する暮しをつづけていたら（その記憶がアイマイだから年譜は難題なのだ！）兄がそういうものを送りたくも送れなかったわけである。そして、少しは落ちついて見えるかも知れない現状にしても、先のことはわからない。つまりいま、私の手もとにそういうものがいくらかあるのは、三度目の強調をするが偶然にすきないのである。

以上、長いことわり書きをしてとりかかるが、結局は到底年譜と呼べるまでに至らないだろう。見通しのように表現したがこれはむしろ約束だ。とりあえずはこうするしかないと私のきめたやり方がそれをいまから裏付けている。

年譜　稿の稿

一九二五年(大正14)

八月五日　東京府北豊島郡西巣鴨町三二一四で出生。父大木操30歳、母ゆき26歳の二男。

――六歳上の兄静雄の手紙から)君の生れたのは八月五日のまだ暗くはならない夕方で、それまではたしかに晴れた日であったと思うのですが、ちょうど君の生れる前から烈しい電光雷鳴がキラメキとどろいたのをよく覚えています。一瞬の豪雨でまさに真夏の雨。向原（現都電王子電車停留所）の酒屋の店の、土間を通り抜けると巾の広い向う側に板のない段ばしごがあって、頑丈な倉庫のような木造の空間が君の生れたところでした。二、三軒先の銭湯やその前のT字路までは記憶してますが、あとは一切覚えていません････

当時父の剣道の師だった中山博道から一治(カツハル)と命名された。命名書とへその緒がある。

父の出身は千葉県の現在八日市場市になっている農村。兄はそこで生れ長屋門や池のあった家を覚えているという。

父の父の死・破産で若い夫婦が長男をつれて上京、酒屋の二階の間借り生活をしている時の二男出生。父は警視庁巡査になる一方、郷里で習得した剣道の専門家を志して中山博道の有信館（小石川春日町）に学んでいた。

出生翌年には住所が東京府北豊島郡滝野川町大字滝野川七三三に移っていたと町長名の「第一期種とう済証」でわかる。その他、大塚、蒲田などに住んだことを父母の断片語で後年に知ったが自分の記憶はない。兄からは何も聞いていない。　　作品「背が見える」

一九三二年(昭和7)

四月　千葉県東金町の東金小学校へ入学。父がいつ千葉県巡査に転じたか知らないが、小学校以前に市川、大原に住んだ。市川には父のあらたな剣道の師西久保弘道の弘道館があり、そこで西久保の肥満した腹に抱き上げられたことが第一記憶ふうに残っている。父の剣道はおそらく大原を最初に、周辺いくつかの警察に巡回指導する方面武道主任というものになっていた。私も大原から竹刀を持たされ警察の道場に立った。この年四月妹文江誕生。

一九三八年(昭和13)

三月　東金小学校卒業。四月　成東中学校入学。秋　関東中学校へ転校。この三年前両親は東金に自宅を建てたが、それ以後に父は野田、成田に単身転勤、中学を卒業した兄は就職して東京などに住み、家は母、妹、私の三人暮しになっていた。文学少年・不良少年の傾斜をつよめた。

一九四〇年(昭和15)

初夏　童貞放棄、相手は一歳上の女学生Y・Y。中学中退。

失職帰宅の兄と菊岡久利を読んで西山勇太郎の雑誌「色即是空」（すべてはながる）を知り、その雑誌で読んだ辻潤につよくひかれた。

十月　東京府北多摩郡の飛行機会社へ兄と就職。兄は企画課記録工、私は労務課記録工(私の時給11銭5厘)。会社で詩集「道標のない地帯」ほか一冊を製作したが現在は全然残っていない。兄とその友人に連れられて吉原に行き、以後は単独で亀戸に行きはじめた。下村千秋の「天国の記録」の影響である。古本屋で辻潤を漁って読むほか、林芙美子「放浪記」ゴルキイ「私の大学」大杉栄「日本脱出記」菊岡久利詩集「貧時交」「時の玩具」などから陋巷志向を募らせ新宿旭町の木賃ホテルに初めて泊った。

一九四一年(昭和16)

六月　父の友人が親方をしている満洲国ハルピン市郊外の建設現場へ行ったが翌月には日本へ帰され、すぐ大観堂書店出版部に採用されたのもつづかず、五反田の小工場を経て北海道の炭坑夫になった　　　　　。作品「豚足歌」

一九四二年(昭和17)

四月　北海道から帰る。石川三四郎さんの紹介で千葉県遠山村の木村荘太さんのもとで農夫兼学僕生活をすることになったが徴用令がきて実現しなかった。徴用されたのは横浜市にある三菱造船横浜ドックの仕上げ工場。寮からのがれて放浪、ほとんど出勤せず警察・憲兵隊に留置された。

この年、はじめて詩を「若い人」に投稿、掲載された。兄のすすめで林房雄「転向に就いて」を読み、父の意向に従って海軍志願兵を受験、合格した。この年の夏に父は自宅裏に町道場「弘道館」をひらいていた。

一九四三年～四四年(昭和18～19)

五月　横須賀第二海兵団第一二二分隊第十二教班に入る。主計科。八月　鈴鹿海軍航空隊主計科に配属。翌年一月東京の海軍経理学校普通科衣糧術練習生に入校。四月　外出から帰らず約二週間、戦時逃亡罪等で懲役一年八月の軍法会議判決、横須賀海軍刑務所に服役。　　　　　　　　作品「爪」

一九四五年(昭和20)

三月　不馴化性全身衰弱症で横須賀海軍病院入院、刑の執行停止。六月　退院復獄。八月二十五日　敗戦による第一次釈放、二十六日帰宅。九月　自宅近くの小私鉄に就職。

――（残っていた辞令）雇ヲ命ズ　本社勤務ヲ命ズ　月給金五拾円ヲ給ス　昭和二十年九月十四日･･･

十月　帰宅あいさつに対する木村艸太(もと荘太)さんの返信で辻潤の死を知る。兵役をまぬがれて大手私鉄自動車部に勤めていた兄とガリバン雑誌発行を相談。印刷用具一式はあり紙のヤミ入手の道はついていた。十一月　「ぶらつく―黒色或は散策」創刊号発行。西山勇太郎の寄稿〈辻潤氏から金三円也で買った「萩原朔太郎氏の手紙」、その他〉によって戦争末期の辻潤の死をはじめてあきらかにした。木村さんの寄稿はホイットマンの詩の新訳だった。

創刊時同人・伊庭弘忠　近藤信之　村井博　谷義夫　作田仁衛　金井朝忠（以上兄の関係、以下私の関係から）早野茂夫　篠原逸平　清水敏男　西川賢造。私の誘いに応じた四人は小学校同級生だが、清水はのち自殺、篠原は病死、早野との交わりのみ断続して現在につづいている。

十二月　職場に労働組合を結成、組合長となり半専従で外に出はじめた。　　作品「故篠原逸平に」

一九四六年(昭和21)

一月　「ぶらつく」第二冊発行、四月　第三冊発行、八月第四冊発行。第三、四冊ではダダカンスケ＝山本忠平の獄中遺稿などを特集したが、そのあと五号発行まで長い休止状態がくる。労働組合運動以外にも接触面のふえた私が交互編集という兄との約束を果さなかったためである。「じんみん新聞」に詩を書いて初の原稿料をもらった。「千葉新聞」「ダダ」「宇宙時代」、「北総文化」「コスモス」などに詩や文章を発表した。妹のゼンソク発病。

岡本潤、小川三男、伊藤和、秋山清、矢橋丈吉、、鈴木勝などの先輩と交わり殊に岡本、小川に親しんだ。

年末　労働組合を辞任。小川三男のいる成田に移りH映画社入社、社長M氏宅に住む。麻雀を覚えた。

一九四七年(昭和22)

三月　K・Wと結婚しその両親のいる家に住み百日余で出た。入籍以前。仕事も放棄して各地のヤミ市地帯放浪。秋に一旦仕事に戻ったが再度放浪。「詩精神」「平民新聞」「東京民報」などに詩を発表。「ぶらつく」はこの問、九月一日付で終刊第五冊が兄の編集で出た。寄稿は秋山清、石川三四郎、伊藤和、尾山始、風間光作、大門一樹、西山勇太郎など。　　　　作品「夕暮近い雨風の街」

一九四八年(昭和23)

四月　兄がS・Yと結婚。家に帰っていたので式に列席した。七月末　町内の縫製工場の自然発生怠業を援けて労働組合を結成、工場占拠ストに入る(70日継続)。その間に中堅鉄鋼メーカー本社に就職、泊り込み工場から銀座へ通勤。十月　争議解決。W・Yと船橋市で同棲。晩秋頃　職場の労働組合の書記長に選ばれて専従。その職務とは別に左翼労働組合運動の中枢と接触が深まり、八幡三郎、海野幸隆、斎藤一郎などとの交わりが翌年につづく。

七月　詩集「ぼうふらの歌」を専門業者のガリバンでブラック社から発行したが保存なし。作品　　　　　　　「日記」1948

一九四九年(昭和24)

松尾邦之助、大沢正道などの自由クラブに参加。「自由クラブ通信」に雑文。

秋　労働組合運動に倦怠、引きこもって発表のあてのない文章を書く。辻潤の墓碑建立記念の「陀仙忌」に参加。

一九五〇(昭和25)

保存なしだが前年末から単独で発行していた労働問題のリーフレットを春に停止。西伊豆を歩いて戸田峠でウグイスを聞いたのは夏直前だったろう。それより早く、四月十五日に木村艸太さんが自殺した新聞記事をどこで読んだのかを忘れている。

私の左ひじ外側上部に小さな傷跡が残っている。横浜東部のどこかで町内相撲大会の土俵ですりむいたのが長く化膿して残ったものだ。その時は運河に浮んだ木造船アパートのU夫妻に寄食していた。しかし、その時とはいつか。一九五〇年のようでもあり違うのかも知れず確定できない。

順序立てられないそうした転々が以後断続している。そこで、ここから先は石野さんがこの詩集に選んでくれた作品に註をつける形で進行させる。「稿の稿」とはじめに称した所以だ。なお、作品の「初出控」にある年次は字義通りに初出年次であって、主題や情景とそれとがすべてただちにつながるわけではない。これはすでに「作品○○」と例示してきた年と初出との関係でもそうだった。しばしば私は回想をより合せて書いている。従ってここから先でおこなう作品への註では、初出年次にこだわらず、思い出せる限り内容に従って順序を整えてみるが、その前、一九五一年三月に協議離婚届出ということがあった。

筆名の使い初め　戸籍名からいまの筆名に移った最初には小説を書き、公募に応じて佳作となった。これは一九五四年だったと思うが、筆名の元は一九五〇年後半から親しんだ当時の「玉の井」にある。通称玉の井は町名では墨田区寺島町である。だからはじめは「玉夫」としのちに改めた。

作品・神戸イーストキャンプ跡（関西手帖のうち）

国鉄三宮駅南西、いま神戸一の繁華街になっているところに「ジャンジャン市場」がまだあった。二十代末か。有名以前の異人館街近くにいた。喫茶兼食堂で働らいた。

作品・歌のある情景

東京山谷。朝ひる夕の三食を売る食堂と深夜酒場を併営するMの調理場で働らいたのが一九五五年ということは、店のおかみ42歳、娘18歳の間に私の30歳が入りウシ年が並んだので覚えている。実際に客がもっとも好んだのは同じ三橋美智也の「哀愁列車」で、歌の題がアダ名になった客もいた。現に酒場だけ営業している店に行っておかみに会うと必らずその話になる。往年の店員は男女十数人だった。

作品にとりこんだ歌を耳覚えで唱えるが音階で表記できない私はジャズメンのUにそこを教えてもらった。

作品・中津大ガード付近（関西手帖のうち）

中津は大阪市大淀区。大阪駅北方とは地図でわかるが、この飯場にいた時はまったく知らなかった。公園のキヨウチクトウの花がうるさかった。この飯場の次の次ぐらいかD自動車の工場新設工事現場に行き、T組世話役Yに付いてK薬品ビル工事に移ってトビ職作業を習得しかけた。

作品・京都平安神宮西（関西手帖のうち）

一九六二年（昭和37）五月七日に父は京都武徳殿で試合中倒れ即死的に死んだ（67歳）。家に戻っていた私は兄と京都に行き骨箱を抱いて帰った。五月に父が京都へ行くのは戦前からの例だったが、この年、初めて私は東京駅まで同行、八重州口で酒を酌み交し寝台車の窓越しに見送って三日目だった。

家へ戻ったのがいつか明確ではないが、月刊誌「T」のこの年五～十月各号に読物小説があるほか、経済誌「K」総合誌「S」漫画誌「D」などに書いていた。また、時に父とともに道場へ出て少年たちの稽古の相手をした。

作品・手の女

二度目の山谷でD食堂にいた時の事実ほほそのまま。

一九六二年十一月二十三日、山谷のA食堂から起った群衆事件のルポを「週刊J」に書いたのもDにいた時。同月二十八日石川三四郎さん死去。葬儀不参。これは相当な自己規制だった。事件ルポをJに書いたのはその前に短編二つを発表した縁による。さらに前「Y」「S」にも短編だが保存なし。経済誌「K」総合誌「S」の編集部に入ったが短期でやめている。前後関係不明。不明という点ではこのころの或る年は広島にいて飲食店三軒で働らいているのが同様に不確定だ。「C新聞」の文化部長K氏を頼り、雑文を載せてもらった稿料で東へ戻る足代としたことは確実。

一九六七年に西山勇太郎さんが長野市で死去したがすぐには知らなかった。

作品・日記1969／伝道／宿題／われら

釜ケ崎暮し、あるいは飯場暮しを重ねているうちにまた詩を書きたくなっていた。一九六六年(昭和41)七月創刊の「人間喜劇」に飛び込み参加したのがそのあらわれ。同誌は二号で終ったが詩の方は焼け棒っくいの火でいまに至っている。「釜ケ崎通信別冊　まだ生きている」という小詩集はそれで出来た。収録作品はほとんど詩集のための新作で、本文には赤の用紙、表紙は黒の薄い中綴じである。岡本潤、菊岡久利、小川光生(三男)、鈴木勝、風間光作、三好弘光、細川順正、山内清、大木静雄、竹島昌威知および故人となった西山勇太郎の十一氏の寄稿を得ている。

――(あいさつと称したあとがきの一部)もう何年も釜ケ崎にいて、自由だ、ひとりだと頬張ったことをいったりしているが、言葉に背いた現実を露呈したのがこの小集である。たくさん書いてもらったのは、先にひとこと弔辞をいただいておくといつでもいい気持で死ねるだろうという、相変らずの自分勝手な都合からである･･･

一九六九年(昭和44)八月五日竹島昌威知発行タイプ印刷　非売品限定百部。石野さんとの縁はこれで生じた。

作品・阿倍野斎場付近(関西手帖のうち)

「まだ生きている」の会は発行後まもなく阿倍野のCで行なわれ秋山清、竹中労両氏の遠来もあった。この詩は同じCで秋晩くに食べた「その日第一食」を、高速道路の新設と市街地改造で一変したあたりの景観に重ねたつもりのもの。「第一食」には当然相手がいた。

作品・手帖／風・贋ダイヤ・墓／K川右岸おぼえ書き

大阪万国博覧会は一九七〇年(昭和45)三月からだが、これらはその当時の労働現場であり心象でもあつた。すでにあげた「豚足歌」や「関西手帖」のなかの「大阪府豊能郡能勢町」は右の意味では同列である。

万博開幕の同日三月十五日付でドキュメント「どぶねずみの歌」が三一書房から出た。

一九七〇年四月二十二日菊岡久利さん死去。

同人誌「鯤」の創刊は一九七〇年五月。創刊号に高橋徹、三好弘光、粟田茂、山内清、竹島昌威知、川島知世と私が参加し、二号に高島洋、向井孝が加わり、三号に岡本潤、秋山清の寄稿がある。四号保存なし。

一九七〇年八月二十四日小川三男さん死去。現場の帰途夕刊でガク然。成田に行き通夜、葬儀参列。前田淳一氏などに再会。帰途東京で岡本家一泊。

この頃から「小野十三郎ノート」と「年譜」の調べも始めて、居着いているドヤの三畳間は寝場所がない古雑誌倉庫と化していた。そういう一方では釜ケ崎の雑誌「労務者渡世」編集委員会に創刊(72年12月)から参加し月刊の毎号に記事を書いた。

作品・岡本潤に

岡本さんが亡くなったのは一九七八年(昭和53)二月十六日である。入院は七二年九月八日だった。私がうろうろ転々をくり返している時、気にかけてどうしているかと尋ねてくれたのは石川三四郎さん、小川三男さん、西山勇太郎さんと岡本さんだと、これは兄に聞かされていた。

だから、ということではなく、釜ケ崎暮しなりに少し落ちつくと岡本さんへの便りは欠かさず、東京へ出れば必らず訪ね、自伝(「詩人の運命」立風書房)を出すことや日記の雑誌発表(「文芸」)を手伝った。一種の肉親的感情を二十代早くに知って以来抱きつづけたのである。おそらく岡本さんにも似たような感情があった、と推し測っても私の思い上りではないはずだ。棺に納まった顔、その棺が火葬のかまどに運び入れられるところ、うすけむりの煙突、そんな写真を私は撮った。おれが撮っておかねばと、ひるみを押してのことだった。その延長線上に詩はあるが、いま読み返すと、載せてくれた雑誌「遺言」の編集発行者中島康允氏までが、岡本さんよりぐーんと若いのに亡くなってしまったことを想起せずにはいられない。

詩に書いた岡本さんの時計は、電池を換えに行ったらもう駄目ですと言われ、どこがどう駄目かも聞かないでそのまま箱に入れてある。修理してまで動かすことはないという瞬時の納得であった。

時計を手渡された日が結婚式だった孫娘のT子さんにはいま男の子がいて非常に活発だという。T子さんを通じてひいおじいさんの血が流れているのだろうか。

岡本さんが亡くなる少し前ごろから肥りすぎ(78KG)もあって月刊「G」などの雑誌や新聞の雑文書きに生活の重心を移した。住居はアパートの六畳に替った。なお現在の体重は65～68KGの間で日々変化する。身長1・65M。住居はやや広さを増している。

以上で一応の区切りとしたい。不十分は承知だが何分いつまでかかったら不十分でなくなるか見当をつけられない作業なのである。また、この詩集の編者兼制作者である石野さんが工程を組み上げているらしいことも、ほんのわずかにだが不十分の弁解のなかに入れさせてもらう。そして、到底足りぬ補ないで重複も出てくるが、いままでの私の本と、関係あるいは参加した本の主なものの一覧表を作ってみた。

一九四〇年十一月？　詩集「道標のない地帯」ほか一冊いずれも自製ガリバン　ほかとしたのはアフオリズム集のこときもので辻潤や萩原朔太郎をマネた

一九四八年七月　詩集「ぼうふらの歌」業者製ガリバン　ブラツク社発行

一九六一年六月　共著「ドヤ」　底辺の会編　三一新書　一五〇円

一九六九年八月　詩集「まだ生きている　釜ヶ崎通信別冊」竹島昌威知発行　タイプ版　非売

一九七〇年三月　ドキュメント「どぶねずみの歌」　三一書房　七五〇円

一九七三年十月　共編「日本反政治詩集」　立風書房　七五〇円

一九七四年四月　岡本潤自伝「詩人の運命」　立風書房　千七百円　解説を担当

一九七六年五月　詩集「わがテロル考」　VAN書房　三九〇円

一九七六年八月　編「労務者渡世　釜ヶ崎通信」　風媒社　二千円

一九七七年八月　ドキュメント「私の大阪地図」　たいまつ社　千円

一九七八年四月　評論と詩「釜ヶ崎　旅の宿りの長いまち」プレイガイドジャーナル社　九八〇円

一九七八年六月　詩集「情況と感傷」　VAN書房　五百円

一九七八年十月　「岡本潤全詩集」　本郷出版社　五千六百円年譜を担当

一九七八年十月　「小野十三郎全詩集」　立風書房　特製限定版　七万五千円　年譜を担当(翌年九月普及版発行)

一九七九年五月　編「資料小野十三郎1」　詩債庫　タイプ版限定一五〇部　二千円　同書の「2」も部数定価を同じくして八月発行

一九七九年十月　共著「ストリップ昭和史」　インテリジェンス社　二千円

一九八〇年十月　「小野十三郎ノート　断崖のある風景」　プレイガイドジャーナル社　千六百円

一九八二年六月　詩集「あとでみる地図」　VAN書房　千円

一九八二年十一月　「辻潤全集」別巻　五月書房　三千八百円　「晩年の一断面」収録

一九八三年五月　「わが詩人考　アナキズムのうちそとで」編集工房ノア　ニ千円

一九八三年八月　「岡本潤戦中戦後日記　時代（とき）の底から」風媒社　三千二百円　編集と解説

一九八四年七月～八月「小野十三郎展」　阪急学園池田文庫主催　企画構成を担当

一九八四年十月　「西山勇太郎ノート」　虚無思想研究編集委員会　千円

こうして並べてみると、作品個々に関説したのとは別に、ああ、ああと浮んでくる事や人や場所がある。順序立て難しとか前後不明とかを口実に(実際でもあるが)寝かせてしまったあれこれのいくつかは、相当明確化しかけている。だがそれを追っていたら、究極、いつ完了となるかわからないということでは前言を訂正なしにくり返す。

数年前か、私は「遠景と近状」という詩を書いた。詩集に入れ忘れ雑誌も失なっているがタイトルだけはいまも記憶にあり、自分の年譜を作るということは、おそらくは部分だけで書いたその詩を総体にひろげ、より客体化する作業なのだと思い知らされた。ひとさまの年譜編成ではどんなに熱心にやってもその点がおのずから異っていた。そこをわからせてくれたことで石野さんから与えられた難題に感謝している。またもや不十分を持ち出すなら、難題ゆえに解答不十分を石野さんも予知していたのではないか、ということだ。

一九七七年(昭和52)十月二十六日　母死去(八〇歳)

一九八二年(昭和57)九月三十日　妹死去(五〇歳)

一九八四年(昭和59)二月下旬　兄心筋梗塞で入院　現在は通院加療中

ここでまた思い出したが、一九七四年四月にはほぼ十日程度の入院を私も経験している。ノドが痛み、つまる、という症状からだったが病名を知らないまま治ってしまった。この入院では竹島氏ほか多くの友人たちをわずらわせた。

ごく最近のこと

「文学」85年1月号に「アナキズム詩史のちいさな襞　渓文社と西山勇太郎・木村鉄工所」

「月刊近文」85年1月号に「日録抄」第56回と「アルバムわが詩人たち」第76回

その他「のつくあつぶ」「電波新聞」「TAXI！」「関西文学」「虚無思想研究」「樹林」「解氷期」など

――できうれば詩篇を上回るボリュウムの「年譜」を･･･とは、この詩集の企画当初にもらった石野さんのたよりの一節だが、まとまりなくだらだらとして、徒らに石野さんの労を増す結果となってしまった。これで終りとする。

石野さん、どうぞよろしく。

一九八四年十一月三十日　寺島珠雄

編者あとがき

寺島さんの書かれたものは一九六九年発行の「釜ケ崎通信別冊」以来ほとんど送っていただき読んできました。本書はその中からほんの一部の詩作品二十二篇と、書き下ろし自筆年譜(稿の稿)を収録したものです。

掲載作品の選択には、第一次案を編者が出し、寺島さんの意向による入れ替えや、小型タイプライター専用活字の制約による割愛などのことがありました。

本書は自家用テクスト版的なものとして、タイプ打ちから製本まで手造りで、本年一月発行を期して作業を進めていたのですが、編者の家内が突如発病入院したため作業は長く中断、結局製本などは業者に委託することになりました。

当初の工程にあわしてかなり無理して自筆年譜の作成作業を進めて下さった寺島さんにはお詑びも含めてまことに深謝深謝です。

一九八五年三月二十六日石野覺